

第 50 回全国学校体育研究大会長野大会 第 2 回プレ大会 講演会記録

期日 2010.12.8

会場：長野市立篠ノ井東中学校

テーマ 「全国学体研長野大会に向けて」

文部科学省スポーツ青少年局 教科調査官 白旗 和也先生

来年度の長野大会は、学習指導要領が小学校では全面実施、中学校では移行措置最終の年となる。このうえない、やりがいの大会となる。学体研の一番のよさは校種を越えて授業が見られること。今回の学習指導要領では、校種を越えて12年間の体系化を重視している。

今回の授業は、両校とも意図がわかる授業だった。小学校はアンテナハードルを使って、ポイントとなる手順を子どもの思考の流れでまとめられていた。言語活動にも対応した手立てとなっていた。先生の日頃の指導がよくわかったのは、子どものノートである。子どものノートがとても丁寧で、先生がよく目を通していているのがわかった。だから、子どもたちも丁寧な表現をしていた。授業をする上でとても重要なことである。中学校では、先生の言葉がけに意図があり、よかった。解答を示すときもあり、また、解答を示さずにヒントだけ与え、あとは子どもたちに考えさせていた。ただし、ゲームが難しい感じがした。3対2のドリブルなしにしているの、ボールを持った時に残りの2人に完全にマークがついてしまうと振り切らない限りボールをもらうことはできない。ドリブルがない方が易しい印象だが、マークを意識されると逆に難しい。もしドリブルがあれば、ドリブルした子にマークが1人つくので、スペースが作りやすい状況になる。それに比べるとハードな条件だった。それでもよくボールを受けて、つなく、シュートを打つということができていた。両授業を見て共通して感じたことは、子どもが一番楽しみにしていることは何かということ。ハードルでは、タイムを縮めること。そのために技能を高めていく。そうするともっとタイムを表に出してもよかったのでは。子どもたち同士でもタイムを計ることで、回転よく、繰り返し進められたのではないか。バスケットボールでは、体系化を考えるとゲームからスポーツに移行していく時期である。バスケットボールの簡易化されたゲームの楽しさを味わっているところから、バスケットボールそのものの楽しさへ移行していく。そうなるが一番楽しいのが、オールコートでのゲーム。ここで勝ちたいという気持ちが生徒にあって、初めてそのために技能や作戦を身につけたいなという思考が生まれる。

秋に見た100くらいの授業の中でこれが課題でないかなと思ったことを関連させながらお話しする。移行については、小学校ではあと3ヶ月。中学校の15ヶ月。しかし、小学校を考えるとあっという間。準備は、中学校は保健とか体育理論を含めて大変。しかも、目標と内容が中3で変わることもあり、仕組みが変わったのは中学。

時々「体育って、何を教える教科なのか」と聞かれる。体育だけでなく、学習指導要領全体から体育について考えることが大切である。日本の教育で目指しているものは生きる力をつけることである。現行の指導要領と同じであるが、単純な継続ではしていない。1回まっさらにして今の教育で何が大切か話し合ったところ。「生きる力」となった。今回の学習指導要領では明確なキーワードを出していない。なぜならば、教育はそんな一言では語れない。よい教育のためにはもっと悩まなければならない。

確かな学力では、日本の子どもたちの大きな課題とされているのは、課題解決能力。この課題解決能力を育成するために、思考力判断力等の育成が必要。これを育成するために、言語活動を重視しなくてはいけない。そして、課題解決能力を育成するために、基礎的基本的な知識や技能をおさえていなかったことも同様に課題である。土台がないところで、さあ考えてみるといわれても、無茶な話。おさえるものはしっかりおさえ、それを活用しながら、課題解決能力を育てることは全教科で共通である。体育も同様に考えていかなければならない。この方向に基づき体育で目指すのが「豊かなスポーツライフ」。豊かなスポーツライフを送るためには、その人なりの課題解決能力がきわめて重要。

体育に限っていうと、時間時数が増えた。実技教科では体育が増えた。生きる力を育成していく上で、体育にかかる期待というのはものすごく重い。逆に言うと、この5年間くらいで期待にこたえていかないと、次は時数を減らされる可能性もあるので、これからの取組が重要である。日本の体育は非常に恵まれていて、海外と比較をしていくと、諸学校の授業時数を見たときに、日本ほど全校種を通じて体育を確保している国はない。体育関係の施設も世界で1番充実しているのではないか。だから、われわれは世界で一番いい授業をしなければならない。

豊かなスポーツライフを目指すために目標を変えた。これまでは、運動に親しむための資質や能力がキーワードでつまり運動とのかかわり方を学ぶことだったが、それは今回では義務教育の段階でしっかりやっていく、特に小学校では中学校へつなぐ基礎ということで、高校は卒業したあとも運動を継続することを目標にしている。ところが、内閣府の調べによると、運動不足の人がかなりいる。運動不足だと感じる人が平成21年には75%もいる。4人に3人は運動不足だと感じている大人がいる。年齢別に見ると、20代30代とだんだんと運動不足を感じている人が増えて40代がピーク。

8月にスポーツ立国戦略をつくった。スポーツ文化の確立を目指している。スポーツは、するだけでなく、見ることも支えることも含まれる。こうした目標に向け、全国民が必ず通るのが学校体育。だからスポーツ立国戦略のベースは全員が最も魅力を楽しむことができる学校体育ではないか。

(指導内容の体系化の表を示して) 体系化・明確化・系統化は別の用語。(系統性...縦のつながり 明確化...それぞれの学年で何を身に付けさせていくのかははっきりさせること 体系化...全体の調整を図ったもの。)

最も大事なのが、発達の段階に応じた学習をすること。子どもたちの発達の段階にフィットした授業なのかどうかをいつも振り返る必要がある。小中高とそれが達成されれば豊かなスポーツライフにつながるはずと信念を持っている。

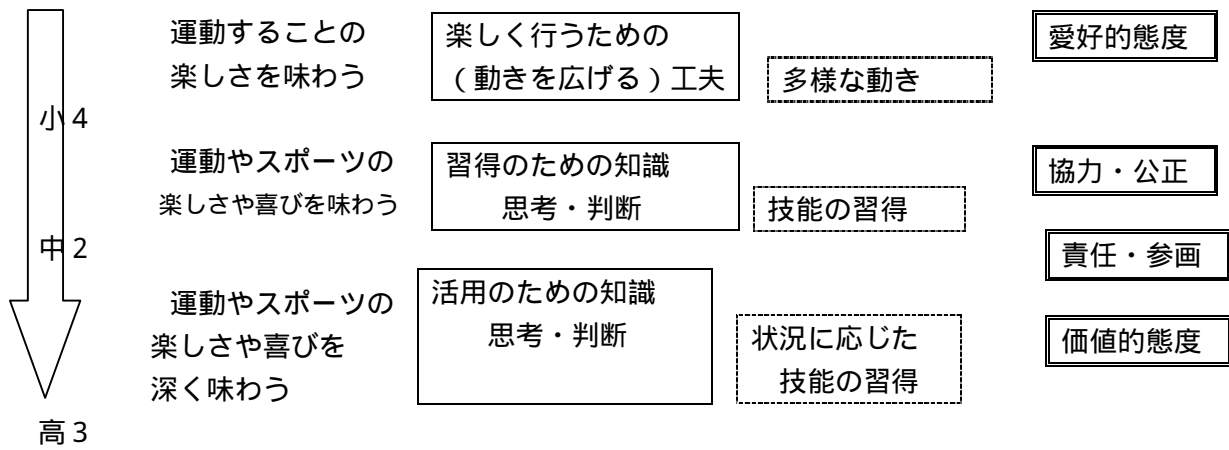
「各種の運動の基礎を培う時期」(小1~4)とは、技能のみでなく運動との関わり方、運動を通して学べること(関わり方・ものの考え方等)全て。

態度	好きだから運動する(愛好)	必要だから(価値)に向けて
	小 灘	灘 高
	[進んで取り組む]	主体的に(自分で判断)]
協力・公正	協力して・マナー	役割・責任
	小1	中
		高め合う・合意形成
		高3
安全	気を付ける・気を配る	安全を確保できる
	小	高

中学校での変更点 特性や成り立ち・技術の名称や行い方を、運動しながら身に付けるように変えた。知識を元にした思考判断「工夫する力」を核にしている。

小学校の知識はいらないのでなく、「運動の行い方を知る・練習の仕方を知る」という知識は必要。ただし、中学校以降の客観的な知識とは違うので、知識と思考・判断を別にしていない。

学習指導要領の内容は、小学校低学年(運動遊び)からつくっている。大事なものは、「楽しくて、夢中になって取り組むこと」がスタート。「好きで取り組む」=愛好的態度 「もっと楽しむために工夫する」=動きが広がる 多様な動きの獲得



小学校低中学年まででは、運動することそのものの楽しさを味わえるようにすること。次の段階では、「楽しさや喜び」という表現に変えてある。『楽しさに成就感が入っている』つまり楽しさの質が変わっている。最終段階では「もっとやりたいものを選んでいく」段階であるので『深めていく』楽しさの質にしたい。「楽しさ」とその質を発達段階に応じたものにするために、「学習内容」を身に付けていくことは緊密な関係である。そうしないと『豊かなスポーツライフ』として生涯にわたって運動するわけがないから。

『楽しさ』の質が変わっていく。 児童生徒の思考・欲求・心身の発達にあった授業をつくれるか。

実態把握 をしっかり行い

楽しさの追究 長く続けるエネルギーになる

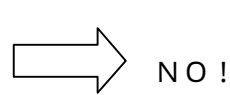
どの年代にも、それぞれにふさわしい楽しさがある。

《最近こういう質問がきた》

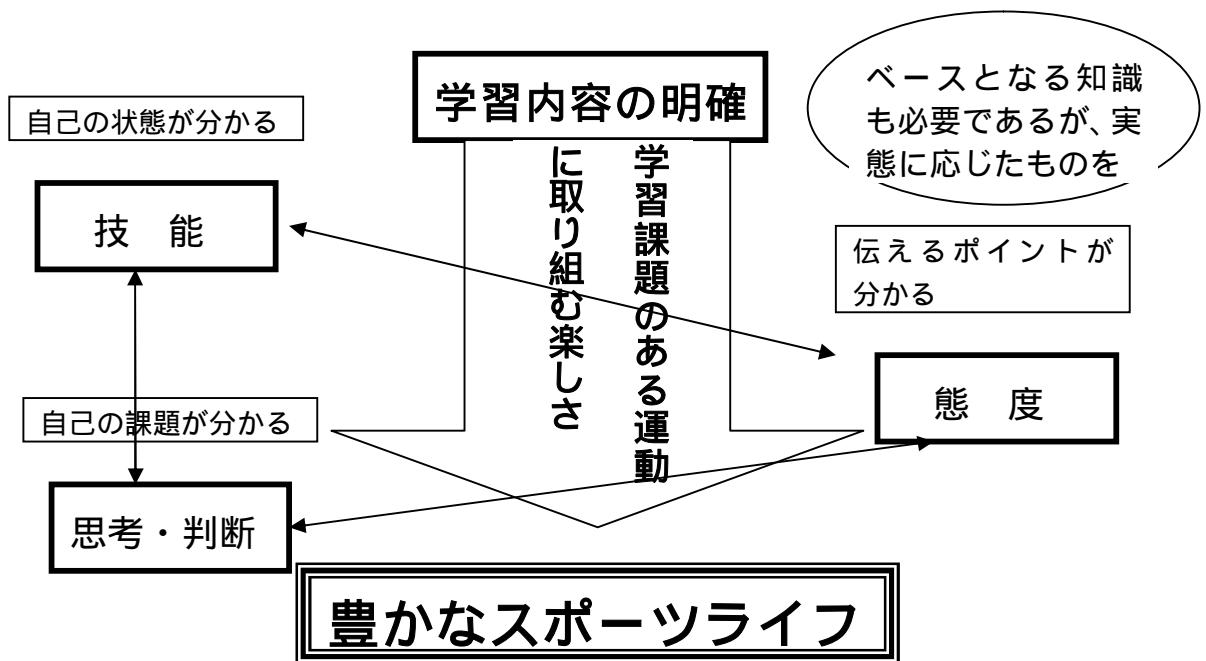
教師の指導力とは教師主導の授業ですか？

教師は満足しているけれど、子どもは楽しそうじゃない。

指導内容の系統性とは、内容を前倒しすることですか？



木を見て森を見ない授業にならないように 豊かなスポーツライフ



上の図で、態度、技能、知識は、学習内容を明確にするとはっきりするが、思考・判断だけはどのような学習をするかによって差が出る。これらのバランスが必要。

二本の柱で授業を考えるべきである。

何を学習（指導）するのか = 指導内容の明確化・系統性
どのように学習（指導）するのか = カリキュラムの編成
特性などの楽しさを含むこと = もっとやりたいと思う授業

課題解決できる力を付ける授業

指導内容の明確化や系統化は 授業で身に付ける内容を明らかにしたに過ぎない
教えるべき時にしっかり教える指導をしたい

×教師がどんどん教える指導をすべき

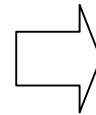
×できるようになればいい

どのようにしてできるようになったか（過程が大事）

どういうタイミングで何を与えたら良いのか、活動をしたけど何が身に付いたのかははっきりしなかったため、指導内容の明確化・系統性を整理したのが今回の学習指導要領。

生きる力が育まれる体育授業をどうしていくかが常に問われる。

将来実際に使わない種目であっても、できるために練習を選ぶ、粘り強く練習する、教え合う等をする。それが間違いなく生きる力である。学んでいく中に重要な要素がたくさん含まれていることが大事。



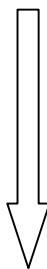
豊かなスポーツライフ

授業の主役は児童生徒！

《例》

ゲームでは

まず、教師の意図のあるゲームを提供 自分たちの課題に気付かせる投げかけ
これをしないと、ゲームをしているが何も変化しない授業になる。



目標の設定 「次は勝ちたいんだ」

助言

課題の選択 「ここがうまくいかない、変えたい」

指導「この課題に対しての練習のポイントはここだ。こんな練習方法がある。」

活動の決定 「練習しよう」

教師は整理してあげる。ヒントを出し、気付かせてあげる。

全チームに共通する課題があれば、課題を分かりやすくしたゲーム

（タスクゲームとも言われている）

楽しさ・喜びに触れられる授業
（欲求に基づいた支援）

技能が身に付き、関わりで態度が育ち、作戦などで思考が育まれるという構造。

《聾学校のVTRへ》

タイムリーに教師が助言・支援をしている

4人でもできる易しいゲームを提供している

一人一人に合わせた学習内容（違った課題）を持っている

意欲を中心に進めるが、しっかりと技能が身に付くように指導している

一人一人に違った役割（態度）

高まりを実感すれば楽しくなる

言語活動の充実という内容に合わせて、書く・話す時間が多くなり過ぎて運動を減らしてしまうので

は、体育としては最も困る。体育の言語活動は、量でなく質を上げること。ただし、考えすぎないこと。

『体育の指導を充実する』ための言語活動である。『言語に関する能力』とは、「自らの考えを深め、他者とコミュニケーションを行うために必要な力を言い、思考力・判断力・表現力等を育成するために必要な力。全教科を通じて育成する。また、教科の目標を達成するために言語活動の充実を図るように。

言語活動の2つ

知的活動（論理や思考）に関すること 教え合い・学習カードへの振り返り・作戦

コミュニケーションや感性・情緒に関すること

すでに、体育の授業ではされていることが多い。

体育の授業で言語活動を充実させるには、思考する前提の情報を持たせること。覚えさせることでなく、良い情報を提供して選ばせたりそれを元にして考えたりさせる。掲示も、子どもの思考の流れでされていて今日の授業は良かった。情報とは、つかませるための手だて。伝える時の分かりやすい言葉。

指導計画作成上の配慮事項、学習指導要領の中に、個々の児童の運動経験や技能の程度に応じた指導、つまり個に合わせた指導、これが体育では大事だと。もう一つ。児童自らが運動の課題の解決を目指す活動を行うようにすること。つまり、課題解決学習。この二つが体育の指導計画作成上の留意点で最も重要になる。この中に身につけることがきちんと盛り込まれている授業を作っていく必要がある。そうになると、計画作りがとても大切。

小学校では、6年間を見通した計画づくりをしていただいていると思うが、担任が変わってしまうと指導の一貫性が保てないことがよくある。担任が変わったら、去年と同じことをしているとか、へたをすると去年の方が高いレベルのことをやっていたということが出てきてしまう。これは、1年間で考えているから。学習指導要領は、2年ごとのまとめりで示している。だから、2年間を見通した上で1年目はどこまでいけばいいというものがあると、それほどあせる必要もないと思う。担任が変わっても、ぶれないはず。決められたことをやっていけばいいのだから。2年間のまとめりを作ることは内容の充実を図る上でポイントになるところだと思う。

中学校の場合、いろいろな小学校から入学してくる場合は特に、生徒の実態把握と最低限のことができるようにする時間をとって、ある程度習得状況を揃えてから中学校の内容に入っていく。また、計画によっては中学校の1, 2年のまとめりとして1回で実施してしまう場合がある。その場合、3年につなげるためには、少し発展的なもの、まとめ的なものをとっておくことによって、意欲をつけて終わるという学習もできないかという提案をしている。

最後に評価の話。今回の評価は、先生方に評価をあまり重々しく捉えないでほしいという方向で考えている。中教審の審議でも評価については、最後はマイナーチェンジで終わっている。だから、目標に準拠した評価は変わらない。また、学力の3つの要素、(1つ目は基礎的・基本的な知識や技能、2つ目はそれらを活用し、課題解決を図るための思考力・判断力・表現力、3つ目は学習意欲と。)に基づいて評価の観点を整理しているが、体育・保健体育は観点が変わっていない。

ただ、今回の改訂でこの3つのキーワードが出てくるので、長野の発表の時には評価は避けられないものなので、原則次の点について押さえていただきたいと思う。

まず、妥当性と信頼性。授業が学習指導要領に基づいて指導されている。学習指導要領の指導内容が押さえられているということ。当たり前と思われがちだが、意外とそうでもない。保健なんかを見てみると「触れるようにする」と書いてあっても、「入り込んでしまう」ことがある。それを全部理解させようと思うので、量がすごく多くなってしまふ。2つ目は、指導したことが評価される。ここでこうやって協力するんだと指導されていないのにそれについて評価されて、Cとなれば、妥当性も信頼性もない。指導がしっかり行われ上で、評価される。

3つ目。評価方法が適切であるということ。評価することを絞り込んでいる。運動への関心・意欲・態度については3つだけ。愛好的態度、協力・公正、安全。この3つを評価すればいい。思考・判断については、つまり課題解決の仕方。自分やチームの課題解決に向けた取り組みの中で工夫が出てくる。

意外と間違いやすいのは、運動の技能。動きというものは、つまりハードルを跳び越えていくというのは、身体能力、つまり体力というものと技能。この二つで身体能力は成り立っている。つまり50Mハードル走を8.5秒で走ったというのは、体力と技能を足した全体……

でも、そのタイムをとって、それだけで評価したなら、妥当性に欠けてしまう。評価の仕方が適切ではない。なぜならば、身体能力を含んで評価してしまうと、もともと大きい子や体力のある子は有利なものになってしまい、走り方がそんなに良くなくても速くなってしまふ。授業で評価しなければいけないのは、どういう走り方、走り越え方をしていたか。動きの質を指導して、評価する。

だから、越えていくものがある程度の障害になっていないと評価が難しくなってしまう。

それから、指導と評価の一体化というが、これには二つの意味があって、指導したことを評価すること、もう一つの意味はこっち。まず、指導する中身をしっかりと明確化しよう。それに向けて指導方法を工夫しよう、そしてそれがどうだったか到達度を見取ろう、そこで課題があれば解決しよう、この一連の流れが指導と評価の一体化という。評価したことが指導に生きてくる。途中段階で見てあげて、伸ばしてあげると、最終的な評価だが、こんなふう考えている。

例えば、1時間目は、関心・意欲・態度。3時間目は、技能の1つ目のところを評価しよう。そうしたら、B君はCだった。そうしたら、この子に支援しなくちゃいけない。概ね満足な状態にするためには支援をする。次の時間に全体としては、関心・意欲・態度を見ていくとしても、この子のことは気にして見てあげなければいけない。指導してあげなくちゃ。それでもまだできない。Cだった。次の時間。思考・判断をやっているが、そこでも気にかけて見てあげる。そして、あ、できるようになったじゃない、概ね満足できる状態だというなら、それは評定になるべき。

というのは、目標は、全員が概ね満足以上になることを目指していくのが授業だから。Cだからといって評定にそのままCをつけるのは教師として恥ずかしい。B以上に上げていくことがまずねらいであって、最終段階で評定をつけなければいけないので、ここを取り違えないようにしたい。

効果的・効率的な評価のためには、評価規準は、絞り込んでほしいと思う。何を指導するのか、指導内容の明確化と言ってもまだ大きい。指導の重点化、更に具体化、相当絞り込んでいく、今日の授業でも指導することはいろいろあったが、その中でもこれだけはできていないと困るなという部分だけを絞り込んで、そこだけ評価規準を作ればいい。そう考えると1時間に評価は1個。保健なんかで、4時間しかなくて、2個ということがあるかもしれないが、これだけは押さえなきゃということに絞り込んでいく。

ただ、そうなってくると、落ちが出てきては困るので、評価計画が必要になる。概ね満足できるかで作っているのだから、評価規準をあまりきちきちに作るべきではない。

ただ、支援するというのが第一。もしCの子がいっぱいいるとなったら、その授業はもう一度考えてみないと。これが指導と評価の一体化でもあるし、効果的・効率的な部分だ。更に、評価はあまり細かくしない。2つ目、1時間に評価するのは1つに絞る。3つ目、おおむね満足な状況といえる具体的な姿をある程度つかんでおく。そうすると支援の手立ても見えてくる。これを一人でやるのは大変だが、研究指定校で組織的にちゃんと作っておくと、すごく楽。教師によってぶれがすごく小さくなる。

それに、プラスアルファの話をする、評価規準はあまり細かくしないほうがいい。「友達と助け合って、練習やゲームをしようとしている。」大体こんなことができているか見ればいい。そして「最低こういうことができたらと見なそう」という、子どもの具体的な姿を出しておくとう分かり易い。子どもの様子がわかるので、先生の支援もやりやすい。それを組織的に今頑張っておくとこの後楽だ。

学習内容があって、これだけは押さえておこうという計画があれば、ぶれずにできる。

最後に50回大会に向けて、留意事項を伝えたい。全体テーマの解釈の部分と各分科会の整合をとっていかないと、でき上がった時に全体が結びつかないということがよくある。それから2つ目として、学体研としての指導の体系化。小・中で連携して整合していかないと、明らかに小学校のレベルの方が高いテーマになっていることも在る。どの段階でどのくらいの技能を高めるといえることが見えていないと、

最後になって苦しくなる。それをどういう組織と指示系統によってその流れを作っていくのかということの前から確認しておいてほしい、大きな方向を同じようにとらえるというところが必要かなと思う。

せっかくなので、来年やって終わりとならないように学体研、それぞれの校種の研究の良さを引き継いでいけるような推進計画を立てていただきたい。

長野の先生は、計画的に細かな所までチェックをしながら授業を作ってくださっているなど今日改めて思った。後は方向がずれないようにおさえていっていただければ心配ないと実感した。豊かなスポーツライフに向けた授業という提案を大きなくくりとして目指していただけると有り難い。